

健康文化

当世人生行路

高田 健三

毎年桜の咲く季節になると、やれ卒業だの、やれ入学だのと、あちらこちらで華やいだ光景が見られる。ある親にとっては、長年に渡る子供教育からの解放であり、別の親にとってはしんどい長丁場の始まりなのである。

今に始まったことではないが、子供が育つに従って、自分の職業を継がせたい、自分が果たし得なかった夢を子供に託したいなど、世の中の親達は知らずのうちに、それぞれの願望を子供の上に重ねて見ているのである。良かりし戦前の時代は、家族はともに暮らし、喜怒哀楽を分かち合い、以心伝心で互いに理解し合っていた。子供がどこそこの大学に入りたいといえ、普段の子供の成績を勘案して、もっと上を狙ってみたらどうかとか、油断せずに頑張れなどとアドバイスめいたことを言うぐらいのものであった。

しかし激しい競争社会の今の世の中、人より一歩先を行かなければ、勝ち組には入れないと思う親たちが多なのは、受験産業の繁栄ぶりを見れば分かる。この十年ほど前から、児童・生徒の学力低下に危機感を持った文科省は、つぎつぎと“審議会”なる物を創り、めまぐるしく学修内容を改変した末、いわゆる“ゆとり教育”と言う名の看板を掲げた。教科内容を三割削減し、その分を自主教材などで強化するという極めて無定見なものである。こんなことでは、正規の学校教育を受けているだけでは、定員割れの大学は別として、思いどおりの大学に入るにはとても覚束ない。

そんな不安を素早く覚った世の親たちは、まず第一歩として小学校の時分から塾通いをさせ始める。こうして子供たちは、自分が好むと好まざるとに関わらず、小学生時代からを含めると十二年間、エリート大学を目指して、ひたすら管理された「入試勉強」のために、塾通いの毎日を送られるのである。もちろん、そんな苦勞をしなくても、どこの高校、

大学にでも“自力”で入れる“親孝行な子供”は、何時の時代にもいるのである。

この年頃の少年少女達（戦前は中学6年、戦後は中学3年、高校3年）は、生理的にも精神的にも大人になる過渡期であり、多情多感な青春時代の真っ只中にある。良き時代であれば、青雲の志も高く将来を語り、ある時は仄かな恋心に悶々としながらも、仲間共々勉学に励み、時には大らかに遊んでいたであろうにとの思いに駆られることがある。それを思うと現代っ子の青春はまさに空白の六年間ではなからうか。

十二年の努力の甲斐（？）あって、目指した大学に目出度く入学出来た時は親たちは自分たちの目標達成感に浸り、本人達は長い呪縛からの開放感でいっぱいになる束の間でしかない。大学の講義が始まり、気分が落ち着いてくるに従い、自分が描いていた大学のイメージと現実との落差が大きかったりすると、真面目に人生を考えようとする学生ほど、これから何をどのように勉強したらよいか迷いが生じてくる。

これまでは管理された入試勉強をしていさえすれば良かったのが、いきなり大学という何でも自分で決めなければならない「自由、自立」の世界に身を置いてみて、自分というアイデンティティの希薄さに愕然とするのである。それに季節は春、情緒的にも悩ましい時期とも重なり、精神的に不安定になり、何事にも手がつかなくなってしまうと、後は脱落ということしかない。過酷な受験戦争とは直接の関係は無いと信じたいが、警察庁統計によれば、78年度以降のデータの中で、学生・生徒の自殺者数が昨年度（06年度）は最多であったというのは気になることである。

小学校から大学まで国公立（現在は法人）であれ私立であれ、国民が負担している国家予算を使って育て上げて来た生徒・学生は、国の将来を担う貴重な知的財産である。国民の高齢化人口が急速に増加し、国民生産性が落ちる一方で、少子化の傾向は止まらないというのに、若者達がそう簡単に脱落してもらっては困る。

ところが、問題はそれだけではすまない。大学を無事卒業すると、今度は誰も助けも教えもしてくれない競争社会が待っている。卒業の一年以上も前から、内容を知るためといって企業を見学して回ったり、中には企業説明会の常連になるほど調べた上で、四月から晴れて目的の企業への入社を果たしたというのに、数ヶ月も経たないうちに仕事が自分に合わないからとか、上司に叱られたとって退社する若者がけっこう多

いという。

彼らは社会の中にあっても人に対しても、常に自分が中心なのである。彼らの辞書(?)には妥協(その言葉が嫌なら協調)という文字は存在しないのであろうか。日本とイギリスに居を構え、それぞれの国の教育問題や、人々の生き方を見続けて来たマークス寿子は、日本の学生達は、彼らだけではなく、その親達も、“自立と自己中心”との違いが分かっているといないと指摘する(日本はなぜここまで壊れたのか:草思社)。

新社会人となって、いきなり直面するのは、学生時代の入試競走とは全く異質の生存競争なのである。人に先んじ出世し、お金を貯め、結婚し、子供をつくり、家を建てそして自分たちの老後の資金を貯めなければならない。“仕事人間”は今に始まったことではない。終戦直後のベビーブーム(47-49年)に生まれた“団塊の世代”と呼ばれる人たちは、雪崩のごとく流入してきたアメリカ文化の渦の中、いわゆる戦後民主主義教育を受けて育ってきた。戦争を全く経験していない彼らは、平和と平等の旗の下、個人重視の価値観を以て、波瀾万丈の二十世紀後半、日本の高度経済成長を牽引し、新しい文化社会の創生に大きな影響を与えてきたといわれる。一方、何事に限らず、競走意識が強く、競走社会を助長した主役でもあった。

そこには必然的に勝者、敗者が生まれる。勝者の常として、社会的、経済的にますます優位な立場が与えられ、敗者との差は広がりこそすれ縮まることはない。近頃は外資系ファンドも入り混じり、M&A(企業合併、買収)の記事は毎日のように新聞紙上を賑わしている。明日は我が社もと気の落ち着かないサラリーマンも多いのではないだろうか。勝ち組は残り負け組は去れと言うのが、今我々が迎つつある格差社会である。

以前、本誌(40号)でも触れた、「年収300万円時代…」の著者、森永卓郎はその続編で、一握りの頭のよいエリートに支配される競走社会に見切りを付けて、もっと人間らしく生きようと、都会を去り地方暮らしに成功した四人の例を紹介している。彼らは皆、金銭に執着せず、自然を愛し、日本の伝統文化に親しみ、協調性に富み、秩序を守る人たちである。今時これだけの条件を備えた日本人はそうざらには居そうもないが、考えてみれば、戦前の日本人像に通ずるものがあるように思える。しかし一方で、同じ目的で地方に移住した人たちの失敗例を或る週刊誌の記事で見た。いずれにしても、実例が少なく、森永流の我が国の

将来像を見通すには、時期早尚である。

今の世を憂う数学者藤原正彦は、日本人は今こそ“情緒と形”を育む武士道精神を取り戻す時であると“国家の品格”の中で訴えかける。本誌41号の拙文の中で、団塊の世代は藤原の論説をどのように読み解くか、興味があると書いたが、100万部を超えるこのミリオンセラーは、年配者（団塊世代？）ではなく、30-40代の男性（団塊ジュニア）に受け入れられている（知恵蔵：'07）というのは、私にとって非常に意外に思えた。日本の証券市場に衝撃を与えたライブドア堀江元社長、村上ファンド村上元社長らが属するこの世代は、年齢別人口で団塊シニアに次ぐ大集団である。団塊シニアの価値観を引き継ぐと見られている彼らの中に、何か新しい“波”が芽生えているのか、それが時代を動かす大きな“うねり”になり得るのか、今の時点で何の予測も出来ないが興味ある現象ではある。

今のままでは税金は増え、健康保険料も高額になり、社会保障費も増額されて、何もいい事はない。その一方で、青少年の凶悪犯罪の激増、官庁、企業などの知能犯罪は数知れず、乱世と呼ばずして経済大国とは烏滸がましい。“陰險悪辣佞姦邪知”の蔓延る日本の現状を立て直すには、何を置いても“日本人の心”を育てる教育から早急に始めるしかない。

教育環境の荒廃がこのまま進んで行けば、若者とは勿論、団塊の世代と高齢者との間の“文化”の隔たりも大きくなって来るように思える。今や家族とは何かを真剣に考え直す時である。メディアを通して知るところでは、現場の教師は生徒との対応に加えてその親たちとの戦いに晒されていると言う。この六月からイギリスの内閣を率いるブラウン新首相は、「子供、学校、家族大臣」を新設したと報じられている。正にこれこそ日本の教育界が抱えている問題そのものである。教育体系の中に“家族”を含めたのは、私が知る限りでは画期的である。その具体的内容を知りたいものである。

今、一番「元気な脳科学者、茂木健一郎は、歳をとると意欲がなくなるのは、生きて行く上で避け得ない不確実性（予測出来ない事象）にチャレンジしなくなるからだと言う。チャレンジする過程で、新しい発見や遭遇があると脳が変化を起こす。それが感動なのである。アインシュタインは“感動することをやめた人は、生きていないのと同じことである”と言ったという（感動する脳：PHP研究所）。感動がある限り“年齢”

に関係なく脳は進化し、新しい創造力が生まれてくるのである。感動という言葉そのものが持つ意味は、“物に深く感じて心を動かすこと”とある（広辞苑）。精神教育は難しいと言うが、脳科学は大いに役立ちそうに思える。

去年、セ・パ両リーグの優勝者で争う日本シリーズで、日本ハムファイターズが優勝した瞬間の場面をたまたまテレビで見た。大歓声の中、スポーツキャスターに今の気持ちはと聞かれたヒルマン監督は、少し間をおいて腕を空に突き上げて叫んだ。“シンジラレナーイ!!”の片言アクセントの一言であった。万感こもった感動が爆発し、大観衆をも包み込んだ瞬間である。私も一度、すごい感動を味わってみたい。その時、どんな叫びが飛び出すであろうか。

(2007.6)

(名古屋大学名誉教授)